

Novyye  
25. 12. 92.

# 素顔のゴルバチョフ

## 元警護官・一年後の独白

ゴルバチョフはいつも孤独だった。もろろん彼が家族の書記長と呼んだライサはいつもそばにいた。しかし、客は皆無といってよかった。夏のフォロス(ウクライナ・クリミア半島の大統領別荘でもそうだった。祝日も記念日も二人きりか内輪で過ごし、党の盟友といえど決してその仲間には加えなかった。ゴルバ

曰課の夕方の散策だけは、政治的晩年にも欠かさなかった。「散歩しよう」と言い出すのはいつもライサ夫人だった。

私は、後ろについて、彼を非常事態から守るのが任

務である。もし急に雨が降れば、政治的晩年にも欠かさなかった。「散歩しよう」と言い出すのはいつもライサ夫人だった。

は聞き取れる距離だった。治に口をはさんでいたとい

は聞き取れる距離だった。治に口をはさんでいたとい

25 Бер, 92.  
夫と政治議論  
人事口出しも

# 「孤独」を支えたライサ夫人

ついに耐えかねて、手で空を切るように夫人を遮った。「くそ、關懷のことくらい自分でやれる」

夫人は夫の身なりを特に気にしていた。ロンドンでサッチャー英首相(当時)主催の歓迎会に出席する時、いきなり「自分好みの靴下を履いていない」と夫に非難を浴びせた。もう時間が迫っていたが、忍耐強

かせることもあった。フォロスでとりわけつらい目に「さい」と彼女らをせき立てた。あつたのは部屋係や給仕の女性たちだった。暑くて、別荘での彼女は厳格で、重労働だったが、ライサ夫人には彼女たちがさぼってまかれているかどうかに

大統領を辞任する直前、ゴルバチョフはキエフ近郊にある旧共産党第一書記の豪勢な公邸でコトル・ドイソ首相と会談した。そのころまでに二人は友人の間柄になった。座って話をするうち、政治議論も尽きた。ソビエト帝国の終えんが迫っており、ゴルバチョフ時代も長くないことを、二人とも予感していた。



ライサ夫人は公私にわたりゴルバチョフ氏の相談役だった(90年11月、ローマで)

突然ゴルバチョフが歌い始めた。最初はウクライナの歌、そして故郷の南ロシア・クバン地方の歌だった。人の良いコル首相は心をなごませて調子を合わせようとした。歌詞はわからないままにメロディーをなぞった。二人は長い間、肩を抱き合せて、川が流れるように歌い続けたのだ。

(文中敬称略)

С.В. 123-125